

本論文は、古代ローマ共和政期におけるローマ人の宗教という営為を、当時のローマ人の心情に即することに留意して、レリギオという言葉の用法に注目して総合的に考察したもので、序章を含めて全5章で構成されている。

序章において、著者は、キリスト教化以前のローマ宗教に対する様々な評価、とくにキリスト教優位史観や古代宗教没落史論などに囚われることを戒めつつ、20世紀の学説史を丹念にたどりながら、著者の立場を明示する。共和政期ローマには様々な宗教伝統が併存しているように見えるが、それらは個々別々に並立していたのではなく、古代ローマに特有の宗教体系が存在したと想定し、共和政期のローマ人が時代のコンテクストに沿って生きていた宗教的現実を捉えることを目標に設定している。

第1章では、古代ローマ宗教の理解に欠かせない基本的な諸概念を簡潔に示して、神々と人間との関係としてのレリギオ、人と人との関係としてのピエタス(孝、敬虔)やフィデス(信義)などが総合的に提示され、その中で本論文が注目するレリギオ概念のもつ意義を説明する。レリギオは神意の傾聴に本旨があること、そこから神意であるヌーメンとそれを祀る神殿、神意を解釈する神官の役割が生まれていること、そしてそれらは、神々と人間との間の信頼に基づいて長期にわたり保たれる互酬性としての“do ut des”の原則に支えられている。これがローマ宗教の体系的基盤を成しているという理解である。

第2章は、ヌーメン(神意)を何うト占の上に構築された国家システムとしての神官職を概観し、鳥ト官制度、腸ト官制度を詳述する。第3章は、レリギオの概念がト占を超えて「死」に関係する諸事象に広がることに着目して、祭礼の中の死者祭祀、墓と葬送儀礼を考察する。そして第4章で、本論文が力点を置くレリギオの語義分析に入る。

キケロと同時代の作家の事例分析に続いて、資料的にきわめて重要なキケロの著作から、レリギオに関して4つの異なる意味を抽出する。①儀礼や儀式を価値中立的に描写するもの、②規範遵守や良心の咎めを示す用法、③神々への尊崇や畏敬の念の意味、④superstitioと区別せずに迷信を指す用法である。分析の結果、共和政末期に神々のサインが膨大になったため適正な儀礼執行に支障が出てきたことも確認されるが、レリギオを逸脱することへの批判的言論が元老院において効果を発揮した程度には宗教性が共有されていたことを読み取って、第1章で提示した宗教的現実が言葉のレベルで実証できたとする。

本論文は、学説史の整理の仕方にやや強引さがあること、キケロの著作が当時の宗教の全体像をどの程度反映しているのかに関する考察の不十分さ、各章の個別事象の検討と論文全体の主旨との関連づけが不鮮明なことなど、改善すべき点はあるものの、共和政期ローマ宗教の全体像の提示という課題に果敢に取り組んだ意欲的な研究であり、とくに著作の価値とレリギオの語の使用回数の点で他の著述家を圧するキケロの著作群について行ったレリギオ概念の分析作業はこの分野における重要な貢献であり、本委員会は本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断する。